

サスペリア



カラー作品■イタリア映画■東宝東和提供

サスペリア
Suspiria



かいせつ

想像を絶する恐怖とショックが，いま全世界に向って走り出した！　このかつてない驚き，この名状しがたい恐ろしさに，あなたはただ声を呑みこんで立ちつくすのみ―――。

'77年最大のショック映画として，すでに本国イタリアで史上空前の大ヒットを放ち，いま世界に吹き荒れているサスペリア旋風の日本上陸である。

映画の原題“SUSPIRIA”は，ラテン語のSOSPIRIから出た言葉で，“スリリング”という意味であるがこの作品の背後に終始からみつく謎めいた人間の呻き声がそれを象徴している。

アメリカからやってきた若く美しいバレリーナが寄宿するドイツの有名なバレエ学校，そこで次々と起る恐怖に満ち満ちた凄惨な事件の数々。この底知れぬホラー・ショック展開に引きずりまわされながら，イタリアの観客が，5分間に1回づつ劇場の椅子から飛びあがったほど。これまでのオカルト映画，恐怖映画の数々を寄せつけないほどの絶大なショック・エフェクトがそうさせたのだろう。

ヒロインのスージーが真夜中の空港に降り立つ開巻から，死の危険に飛び込むラストまでの99分間は不安，奇怪，凄惨，恐怖，鮮血，ミステリアス・ショックの乱舞。その映画手法は，特異変幻の映像と音響の一大カクテルの様相を呈し，ありとあらゆるテクニックを使い尽して見る者を圧倒する。サイケデリックとは全く次元の違う画面構成，色彩の効果，そして驚くべき恐怖のサーカム・サウンドの爆発。その色彩，音声の驚異的な拡大が，サスペリア心理のひとつひとつをあらわにして，全く新しい恐怖の世界を形造っている。

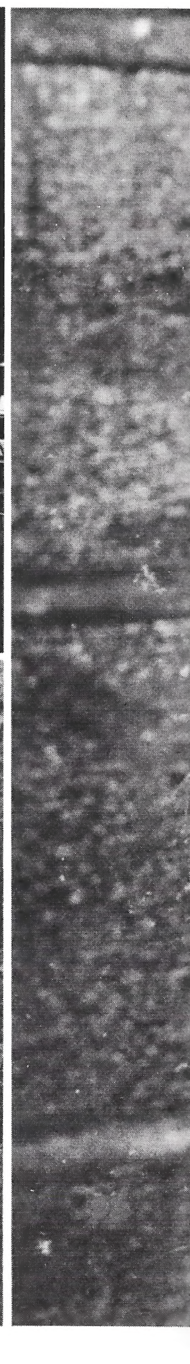
この1作で全世界にその名を馳せた監督のダリオ・アルジェントは弱冠34歳の新鋭。巧みな構成，意表をついた演出で早くもイタリアのヒチコックと大評判を呼んでいる。映画の中で重要な意味をもつ音楽はイタリア人気プログレッシブ・ロック・グループ，ゴブリンの手になるもの。このサントラ・レコードはイタリアで1年分のストックがわずか1週間で売り切れるという映画音楽史













上の大記録をつくった。現代人のもつ不安や恐れを映像と音楽で描き“耳で見る映画”とまで言われているが，ルチアーノ・トボリの撮影は現実の世界を原色で塗りつぶし，全く異次元の世界へと誘う。

主演は500人以上もの公開オーディションで選ばれたアメリカ女優ジェシカ・ハーパー。バレリーナ出身でブロードウェイで活躍していた期待の新人である。そしてアメリカとイタリアを代表する2人の名女優が共演しているのも話題だ。「花嫁の父」などのジョーン・ベネット「カサンドラ・クロス」などで健在ぶりを示したアリダ・バリ。そのほか「O嬢の物語」の若手人気スター，ウド・キールも特別出演している。

失神者続出というローマでの公開は，10日目ですでに「ミッドウェイ」「カサンドラ・クロス」を破る大ヒットとなっている。

イタリア映画界始まって以来という20億リラという製作費を投入，オカルトものを超えたパニックとショックで全ヨーロッパを恐慌状態に陥れた今世紀最大の恐怖映画である。

〈上映時間・1時間39分〉



“サスペリア”は
あなたの背後から襲ってくる———映画評論家　林　冬子

まるでバケツの水を頭からかぶる思いの嵐の夜，アメリカからやって来た若い娘が，なかなか停まってくれないタクシーをやっとの思いで拾ってほっとするスタート・シーンから，あなたは，ずぶ濡れのヒロインと全く同じ心境で，「サスペリア」の不気味な音響と映像の世界にどっぷりはまり込んでしまう。……………なんとも形容出来ない雰囲気。一体，何が起こるのか。耳をつんざくこの異様な音の交錯は，何を意味するのか。そんなことを考えるひまもないくらい，ぐいぐい底なし沼にひきずり込まれるような感じ。

恐怖映画のテクニックなら大体わかっている，と自信満々のかたでも，この映画にはドギモを抜かれるに違いない。まるで画面が２次元のスクリーンの枠を破って，のっしのっしと歩き出し，あなたの背後に回って，後から襲いかかってくるのではないかと，背すじが寒くなる。

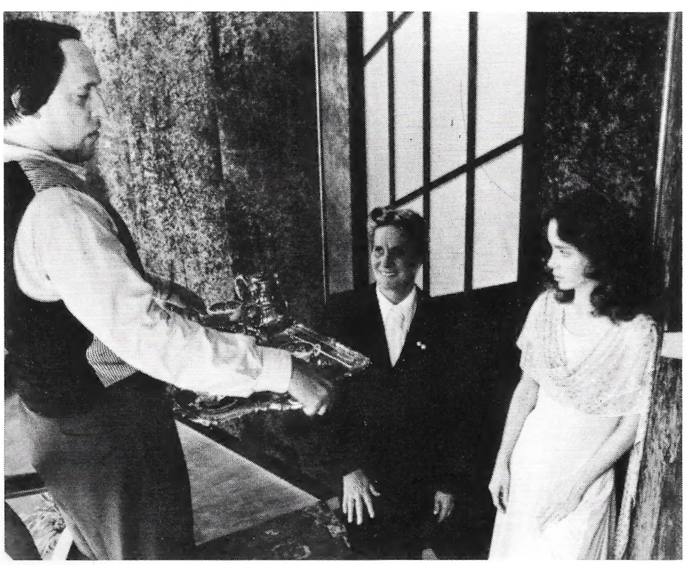
逃げようと思っても，あなたの視線をとらえて放さない衝撃的なカメラ・アングル。光と影と，けんらんたる色彩の洪水。視覚的には，実に美しいのです。だが，美女の胸にずぶずぶ突き刺さるジャック・ナイフの無情な刃と，血と悲鳴の連続，そして血まみれになって宙吊りにだらんとさがる死体。見まいと思っても，これだけは，いやでも目が放せないのです。まるで悪魔に魅入られたように……幻覚剤を飲んで，怪奇と幻想の宇宙をぐるぐる回るように……。

そして“うめき”を暗示する「サスペリア」という言葉そのままに，前衛ロック・グループ，ゴブリンの創造した恐怖の音響は，地獄の亡者のうめきもこうだろうかと感じさせるほどに，おどろおどろしく，ねばっこく，肌にまとわり付く不気味さで，鼓膜と心臓の弱いひとはあらかじめ補強しておくことをおすすめする。

ま，あまりびくびくしていても始まらない。ぼちぼち映画を見る気になって下さい。

とにかく，今まで無名の存在にひとしかったダリオ・アルジェント監督は，この１作でホラー映画(恐怖映画)のこわさに，全く新しい味付けをすることに成功した。サスペンス映画は，人間の神経をじわじわといじめて，一点に集結させ，異常に鋭敏になったその極限に，クライマックスを用意する。甘美なラブ・ロマンスの中にも，サスペンス映画は息づくことができる。スリラー映画は，現実の生活に密着したところに潜む，現実的なこわさである。荒唐無稽なスリラーはあり得ない。だがホラー映画は，予告なしにおとずれる，予想出来ない恐怖のすべてを含んでいる。意表を衝かれれば衝かれるほど，ぞっとする。それは，肌で感じる，原始的なこわさである。人間が火を征服し，２本足で立って歩いて，文明をつくりあげて，ずい分長い筈なのに，まだ私たちには“生理的”なこわさという感覚が残っている。ホラー映画のだいご味は，ここにあると言っていい。

アルジェント監督は，イタリアのヒッチコックと言われているというが，ヒッチコックの「サイコ」のこわさとは次元の違う表現法を駆使している。それは，映像と立体音響と色彩の見事なチーム・ワークで作り出した，まさに70年代の，這いずり回る映画というにふさわしい，耳で見る映画の創造だ。あなたの背後から迫る恐怖は，防ぎようがない。ホラー映画は，ウルトラ・モダンなメカニズムの秘密武器をたずさえて，生き生きとよみがえり，襲いかかってくるのである。



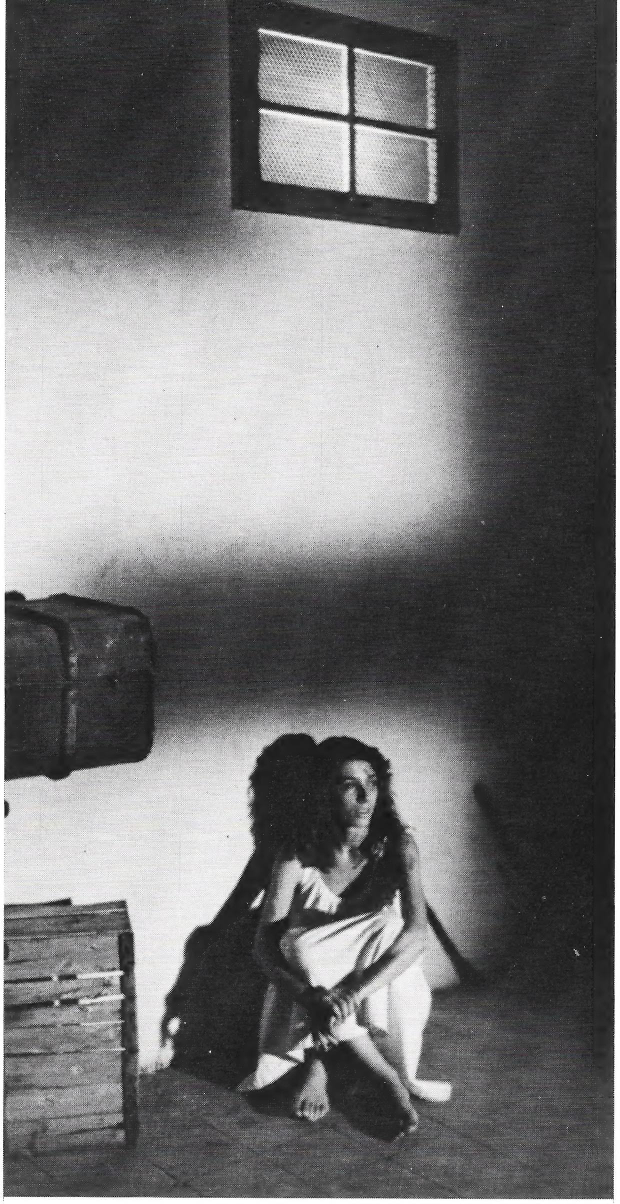












ものがたり

その夜は耳を聾するばかりの雷鳴を伴った凄まじい雨が，ドイツの古い町並に降り注いでいた。バレリーナ志望の若く美しい娘スージーは，このヨーロッパにあるバレエの名門校に入学するために，はるばるニューヨークからやってきたのだ。空港でようやく拾うことができたタクシーに乗って，気味悪いほど静かな夜の街を全速力で走り抜ける。何か恐ろしい事が起りそうな予感に迫られながら，スージーがやがて到着したバレエ学院は，暗闇の中に大きな舌を突き出しているかのように，悪趣味なケバケバしい赤い館。そしてその建物の正面玄関では，不思議なことに若い生徒であるパットが，何者かに追われているように怯え，叫んでいた。恐怖に顔をひきつらせたパットは，雷雨の中を自分のアパートへ，ズブ濡れになって戻っていった。この奇妙な光景を見たスージーは，すぐに玄関に走り寄って，ドアを開けるよう頼んだが，なぜか冷たく拒絶されてしまった。途方にくれたスージーはやむなく街のホテルを探して，最初の夜を迎えたのだが……。

数時間後，アパートに辿り着いたパットの身の上に，奇怪なことが起った。自室に入った時，この世のものとも思えない人間の呻き声を耳にしたパットは，その直後，窓の外の闇の中から，突然，現われた巨大な腕に締めつけられ，しかも何度も何度も胸や腹をナイフで突き刺されてしまう。そのパットの悲鳴を聞きつけて駆けつけた友人の若い女も，不運な惨死の道づれとなって鮮血に染った。一瞬にして起った女２人の異常な死――。

＊

翌日，バレエ学院を訪れたスージーは，ようやく入学手続きをすませて，さまざまな人々に次々と出会った。海外旅行中という女理事長の代行で，学院を支配する副理事のマダム・ブランク，厳格な主任教師のタナー女史，盲導犬に引かれる盲目のピアニスト，ダニエル，ルーマニア人の下男パブロ，マダムの甥で９歳になるアルバート少年等々，すべてがどこか奇怪なムードを放つのはどういうわけなのか。長旅の疲れと学院への不安で，すっかり不調の身体となったスージーは，早速始まった厳しいレッスンの途中ばったりと床に倒れ込んで行った。

スージーは，やがて見舞いに来たアメリカ人の生徒サラと仲良しになり，慣れない学院の様子をこと細かく知るようになった。その夜，寄宿舎の天井から無数の白い虫が落ちてきて，美しい生徒たちの髪の毛に潜り込んでいくという異常な事件が起った。学院はパニック状態。やがてその白い虫の原因は，屋根裏に保存してあったスペイン製のハムやソーセージに寄生したものと判った。当分の間，生徒たちは全員，バレエ練習用の大ホールにベッドを移して起居することになったのだが……。

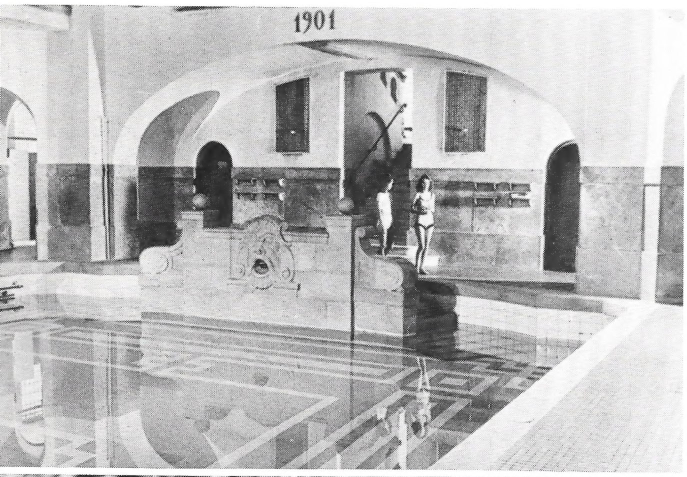
真夜中……。ベッドに入っても眠れないスージーとサラは，大きな仕切り用のカーテンの向こうから洩れてくる不気味な呻き声に，ひどく怯え，またその呻き声の周辺から何処かへ立ち去って行く奇妙な靴音を耳にした。サラはあの呻き声の主が，海外旅行中という理事長ではないかと，スージーに告げたが，翌朝，それをタナー女史に尋ねると，なぜか怒りを含んだような冷たい否定がハネ返ってきた。

＊

翌日，マダム・ブランクの甥アルバート少年が，玄関につながれていたダニエルの盲導犬に突然，噛みつかれるという事件が起きた。タナー女史は異常なまでの怒りを，ピアニス











トのダニエルに叩きつけ，いきなり解雇してしまった。盲目のダニエルは憤激してその場を立ち去った。こうして不気味で不可解な事件の連続に，ひどく神経過敏になったスージーとサラは，夜ごとタナー女史たちの靴音に恐怖と好奇の気持ちをかきたてられた。いったいどうして，教師たちの靴音が真夜中になると学院内に響き，それがやがて，ある一点に吸いこまれるように消えてしまうのはなぜか……。サラはその暗闇の中の靴音を追って，廊下に忍び出た。まるで底知れぬ恐怖の罠に魅入られたかのように。そして一方，その夜，街を彷徨していたダニエルは，いきなり自分の盲導犬に噛みつかれて，凄惨な死を遂げた。この犬の突然の狂暴さは，いったい何が原因なのか……。不可解な闇の奥で，何かが眼を見開いている。

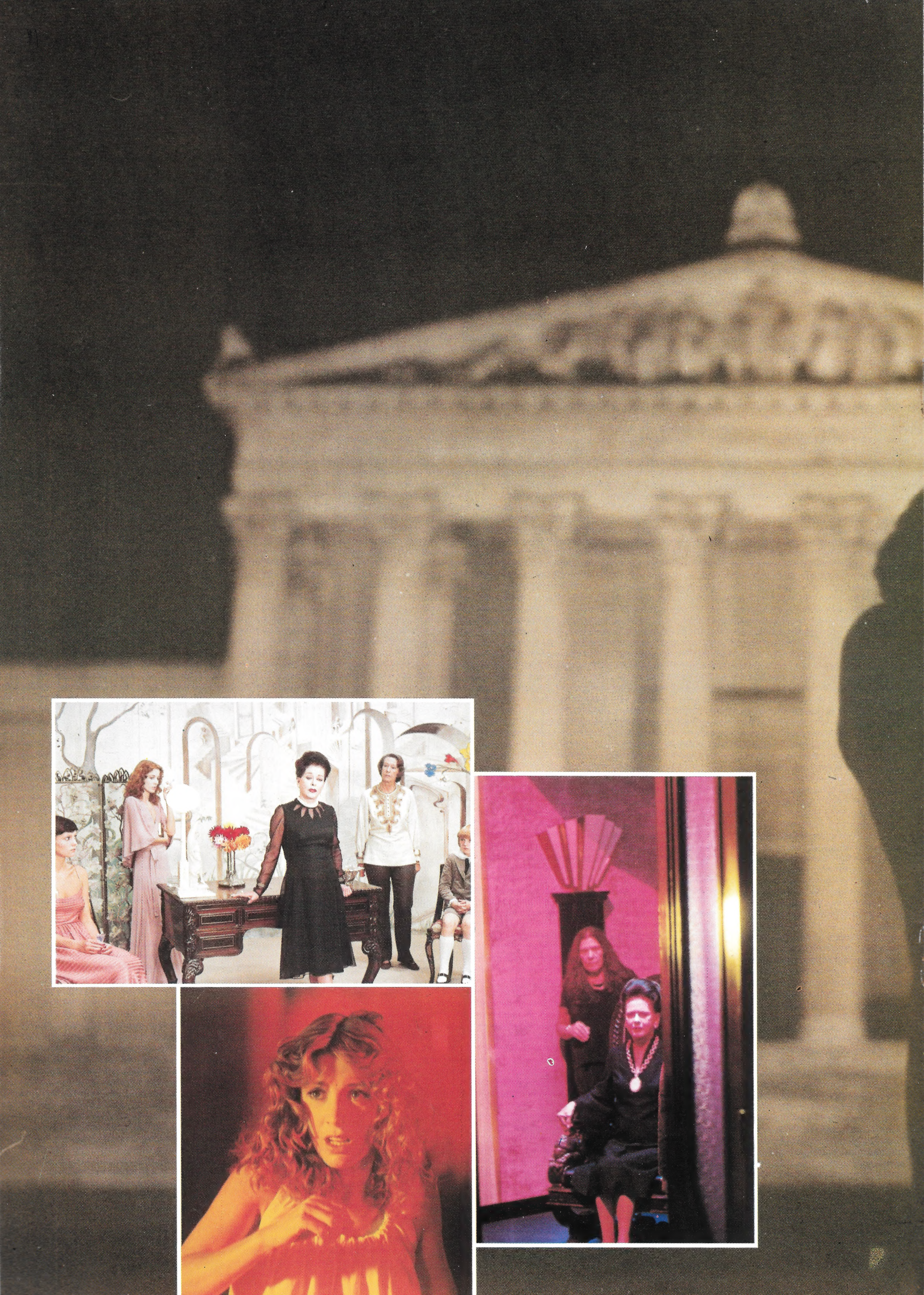


次の夜，スージーの寝室に来たサラは，最初に変死したパットから，事件の直前に妙な話を聞かされた上，訳の判らない数字を書きこんだ謎めいたメモを預けられたことを告げた。パットも何かを探ろうとして，あの酷たらしい死を迎えたのか……。入学以来，病気がちのスージーは，マダム・ブランクがくれる薬のせいなのか，異様なめまいに悩まされ続けている。仕方なく自室に戻ったサラは，そこで全く意外な物音を耳にして震えあがり，廊下に逃げ出た。誰かが追ってくる——追いつめられて逃げ場を失ったサラは，屋根裏に駈けあがり，高窓から工具室に転倒，そこに放置してあった無数の針金線に絡まれて身動きを封じられた。クモの巣にかかった美しい蝶のようなサラの腹部に，何者かの手がナイフで3突き，4突き……。最後にノドを掻き切られ，鮮血に染って惨死するサラ。

＊

翌朝，サラの姿が見えず不審を覚えるスージーに，タナー女史から，昨夜，サラが荷物をまとめて退学していったことが告げられた。何の理由もなくサラがここを去るわけがない——。奇妙に思ったスージーは，サラの友人である精神分析学者フランクを訪ね，学院に相次いで起った奇怪な事件のすべてを話したところ，フランクは学院の歴史とその事件との関わり合いを指摘した。この1895年に建てられたバレエ学院に埋めこまれた秘密とは……。

———そしてその夜。すすんで自分を底知れぬ危険にさらして行ったスージーが見たのは……それは，心臓も凍りつくような何か！





《恐怖の館》型映画とサスペリア

映画評論家　**双葉十三郎**





1

怪奇恐怖映画の題材と設定は多種多様であるが，舞台が１つの家に設定されたものが圧倒的に多い。ぼくはこれを〈恐怖の館〉型と名づけている。今回の「サスペリア」もこの系列である。

ひと口に〈恐怖の館〉型といっても内容はいろいろである。１つの家で怪奇恐怖が起るという設定はみんな同じだが，その怪奇恐怖の原因をなすものにいろいろな種類があるわけで，まず昔から最もポピュラーだったのは幽霊である。オカルトなんて言葉が一般化しなかった時代だから，その幽霊が出没する家は古めかしく幽霊屋敷とよばれた。

だいたい日本の幽霊には足がないが外国の幽霊には足がある。というのが通説になっている。足があるということはナマ身の人間に近いことを感じさせ，従って「幽霊西へ行く」（36年）のようなロマンティックな幽霊や「幽霊は臆病者」（44年）のような愛すべきコメディ幽霊や「陽気な幽霊」(45年）のような楽しいお色気幽霊の存在も可能になるわけであるが，いずれにしても人間の姿のままで登場するという点では共通している。

しかしこのように人間の姿のままであらわれる幽霊は今日ではもう時代おくれになってしまった。最後の佳作になったのは「回転」(61年）あたりではないかと思う。そして，これに代って勢力を得てきたのが，見えないか見えても実体のはっきりしない悪霊怨霊の類である。「呪いの家」(44年）という作品ではある家で急に空気が冷たくなり，ラベンダーの香りがただよってくると階段の上に白いもやもやしたものがあらわれる。これなどはこのジャンルの先輩格といっていいであろう。

見えないものがいちばんこわい，とぼくは思っている。見える場合は対抗手段を考える余地があるが，見えないと処置なしである古いタイプの恐怖映画では，古い館の先祖の悪霊にのりうつられた当主が残忍非道な行為をするというのが多かったが，ロバート・ワイズ監督の「たたり」(63年）あたりになると悪霊が邸を支配しているという設定で，調査にきた連中を大いに苦しめ，１人の女性をその邸から出られないようにとりこにしてしまう。その間にすさまじい物音をはじめあれこれの怪奇現象をおこす。「ヘルハウス」(73年）では科学者が霊媒をつれて乗りこみ，特殊なキカイを据えつけて悪霊のエネルギーを吸収してしまおうとするが，悪霊は猛烈に反撃し，同行の女性たちを痛めつけ，シャンデリアを落下させ科学者を殺す。

これらは人間の悪霊怨霊であるが，最近公開された「家」（76年）のように１つの家そのものが人格化され，その代理人みたいなかたちで１室にとじこもった老婆という存在があり，その老婆の息子と娘と称する初老の男女がこの家を借りる人間と応接の役にあたり，家はその人間たちの生命を奪うごとに若返るというしくみである。枯れかけていた植物に花が咲いたり，屋根板が蛇の脱皮みたいにずり落ちたあとが新しくなったり，アイディアとしては〈恐怖の館〉型のなかでも異色の面白さだった。

2

近年の怪奇恐怖映画ジャンルのなかで最もさかんなのはオカルトの代表みたいな悪魔系列である。悪魔の登場はおなじみ「ファウスト」などずいぶん古くからであるが，「ローズマリーの赤ちゃん」(68年）の大当りをきっかけに現代における悪魔とその崇拝者たちの物語がさかんになり「エクソシスト」(73年）がブームを決定づけた。このジャンルの題材は変化に富んでおり,「エクソシスト」のようになんら関係のない少女に突如として悪魔がとりつくというキツネつきスタイルのものもあれば「悪魔のワルツ」（71年）のように悪魔を崇拝し，その僕となった悪魔族が儀式によって悪魔の力をかり他人にのりうつるといった引越しスタイルのものもあり，また「オーメン」(76年）のように悪魔の落し子が邪魔な人間をつぎつぎに片づけ大統領に引取られるという黙示録応用スタイルのものもある。

これらの諸作は舞台が１つの場所に設定されていないが，根拠地を持つ悪魔族の物語もすくなくない。ドラキュラ伯爵の居城などはその古典的な代表である。現代の物語になると「魔鬼雨」(75年）のゴーストタウンの教会をはじめいろいろバラエティに富んだ場所が使われ，最近の「センチネル」(76年）では１軒のアパートへ越してきた女性をねらう悪魔族の亡者たちがそのアパートの住人を装って集ってくる。が，今回の「サスペリア」の場合はそれとすこしちがって，バレエ学校そのものが悪魔族の本部であり，寄宿制をとって入学して滞在する生徒を犠牲にするしくみになっている。

この秘密をかぎつけて学校をとび出した１人の生徒が惨殺される残酷描写がまず見どころになるわけだが，怪奇恐怖映画のつくり方としては２つの大きな特色がある。その１つはサウンド効果であり，もう１つは色彩効果である。ジェシカ・ハーパー扮するスージーが空港でようやくタクシーをひろい学校に到着するまでのプロローグにおける豪雨暴風の音響



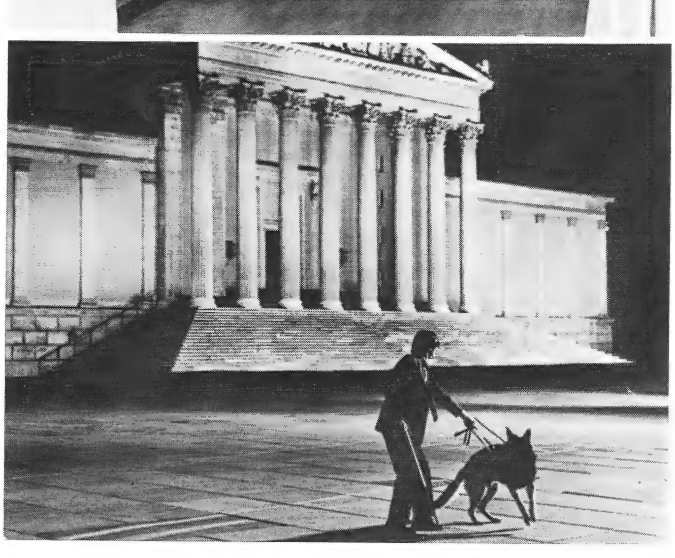
がサーカム・サウンド方式という立体音響システムによってすさまじい効果をあげるのをふり出しに，全編にわたって強烈な音響とゴブリンの音楽が観客を圧倒する。その点でこの作品は立体音響を極度に利用してこしらえた映画の１つの見本といえよう。音が生む怪奇と恐怖である。

一方，画面の色彩効果も強烈である。サイケデリックというよりシュールレアリズム的といったほうがふさわしい現実を超えたカラー・デザインが，バレエ学校内部の場面にこころみられており，オカルト的ムードを盛りあげようとしている。この色彩効果で不安をかきたてられるひとも多いにちがいない。

場面はこのサウンドとカラーの効果を最大の武器として展開されていく。かなり前からの映画ファンにとっては，ジョーン・ベネットとアリダ・バリが副校長とバレエ教師の役で出演しているのが意外でもあり話題になるであろうが，この２人がじつは校長の地位にある悪魔の家来で，悪魔界での昇格を宿願にしているというのが筋書としての面白さの１部である。また院長の悪魔の姿が普通の状態では見えないという設定にも新味を出そうとした意図がうかがわれる。

新味といえばスージーの扱い方も定石とすこし変えてある。〈恐怖の館〉型では若い女性と青年のカップルが登場し，彼女が問題の邸でピンチになったところを彼が救いだすというのが定石である。この映画では恋人ではないがウド・キール扮する精神分析学者が彼に該当するが，肝心のところでは活躍しない。スージーが単独で判断して行動を起し，バレエ学校の内部をしらべ，悪魔族の秘密の礼拝室にたどりつき，発見されてピンチにおちいるが，意外にも冷静さを失わず，輪郭をあらわした院長を突き刺してしまう。独力で悪魔一味を退治するわけで大いに頼もしい。ついでだが，演じるジェシカ・ハーパーはロック・ミュージカル「ファントム・オブ・パラダイス」(75年）で歌手志望の娘に扮しとても抒情的ないい味を出していたのが忘れられない。











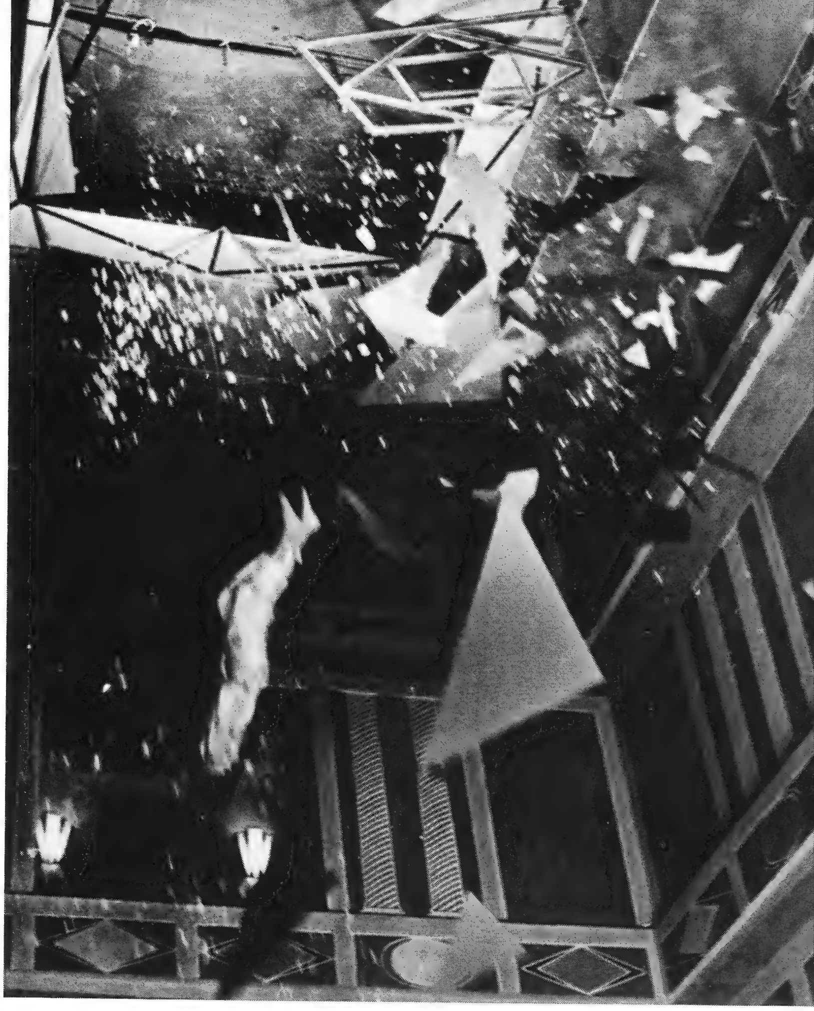
●撮影トピックス

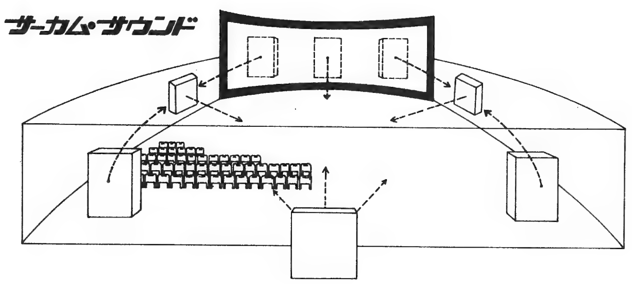
■全世界注目の「サスペリア」は，２月25日，まずイタリアで封切られた。ローマ及びミラノ市では，初日から大ヒット，米・バラエティ紙が伝えるところによると，全イタリアの主要16都市で，封切り10日間で67万ドルの興収を上げる驚異的な記録となった。これは先に公開された「カサンドラ・クロス」を破り，世紀の超大作「キングコング」に匹敵するほどの数字であり，連日満員の場内は，若い女性たちの恐怖の悲鳴でうず巻いた。ローマの主要劇場メトロポリタンでは，1200席のうち，85席ものイスが，公開１週間で使用不能となってしまい，あまりの恐怖のため失神者が続出した。

■77年空前のショッカー映画「サスペリア」は20億リラ（約13億円）以上という，イタリア映画始まって以来の製作費を投入。ドラマの重要部分を占めるバレエ学校は，ローマに空前の大オープンセットを組んだほか，西ドイツのミュンヘン，そしてスイスのチューリッヒに長期ロケを敢行，こりにこったアルジェント演出は延２ヵ年以上の製作期間となった。

■恐怖の立体音響《サーカム・サウンド》は，その驚異的な音響効果もさることながら，イタリア音楽界No.１のゴブリンとの結合によって，見事な映画音楽として昇華，まったく新しいサウンドとして，いまヨーロッパ中の若者たちを熱狂させている。ローマでは，わずか封切り１週間で，１年分のストックを売りつくす記録的な売上げとなった。

■圧倒的にヨーロッパの若者たちを恐怖にたたき込んだ「サスペリア」は弱冠34歳のアルジェント監督をはじめ，撮影のルチアーノ・トボリ，音楽のゴブリンなど，すべてイタリア映画界注目の若手が結集した平均年齢28歳のエネルギッシュな製作スタッフ陣。ふだんは物に動じない現代ヤングたちも，彼らの計算しつくされた映像と音楽と色彩効果に，空前のショックを受けている。





恐怖の立体音響〈サーカム・サウンド〉方式とは…

劇場内前方スピーカー３個の他，左右・後にそれぞれ特殊スピーカー５個を配置，計８個のスピーカーが独自の特殊音を出すために，劇場内を音が駆けめぐり，自由自在の音響世界が出現します。







JESSICA HARPER

ジェシカ・ハーパー

イタリア映画初出演の彼女は，500人もの候補者が集まったハリウッドでのオーディションから選ばれた幸運の新星だ。バレエも出来る女優を…という監督の希望通りの，しかもヒロイン役にぴったりの適性をもった女優だ。映画には「ファントム・オブ・パラダイス」など数本に出演していたが，主にブロードウェイの舞台で活躍，最も名を高めたのは「ヘアー」のシェイラ役である。身長170㎝・体重50㎏・眼と髪はブラウンである。



JOAN BENNETT

ジョーン・ベネット

副校長役の彼女の姿をみてオールド・ファンは非常に感銘深いものを得ることだろう。1910年ニュージャージーで舞台の名優リチャード・ベネットを父に生まれた。恵まれた少女時代を経て，16歳で大資産家ジョン・フォックスと結婚，28年に離婚するや念願のハリウッド入りを果たした。以後2回の結婚歴をもつが，50年代までスクリーンとマスコミを常ににぎわしていた。主な作品には，「若草物語」㉝「飾窓の女」㊹「花嫁の父」㊿がある。



ALIDA VALLI

アリダ・バリ

厳格なバレエ教師を演じて鬼気迫る感のある名演技をみせる彼女は，最近作「カサンドラ・クロス」でも話題を呼んだ。1921年トリエステ市生まれ。父はオーストリア人，母はイタリア人という混血美人だ。15歳のとき映画実験センターに入学，本格的に女優をめざした。36年に映画デビューを飾ったが，47年にアメリカに渡り，名作「第三の男」で一躍大スターの地位を築いた。さらにフランス映画にも進出，イタリアの生んだ国際女優として活躍している。







監督・脚本
ダリオ・アルジェント



DARIO ARGENTO

日本ではまだ馴染み薄い彼だが，イタリアではヒチコックと並び称されるほどのスリラー映画を得意とする異才である。ローマに生まれ，今年で34歳という。古典の研究家として名をなし，新聞の映画批評を担当するようになったのが映画入りのきっかけ。最初はベルトリッチ監督と一緒に脚本を書いたりしていたが，新作や旧作映画の上映，映画研究にたずさわるうちスリラー映画に興味を抱いた。毎日の生活にちりばめられた種々の不安といったものがテーマであるが，彼の作品が若者たちに圧倒的に受ける理由もそこにあると言えよう。この映画の製作総指揮に当ったのはイタリア映画促進協会の指導者でもあり父でもあるサルバトーレ・アルジェント。主な作品には「４匹の蠅」などがある。

音楽
ゴブリン



GOBLIN

いまイタリアで最も人気のある４人のロック・グループ

●クラウディオ・シモネッティ
オルガン／バイオリン／チェレスタ／電気ピアノ／ムーグ

●マッシモ・モランテ
エレキ・ギター／アコースティック・ギター／ボーカル

●ファビオ・ピニャテリ
ベース／アコースティック・ギター／ボーカル

●アゴスティーノ・マランゴロ
ドラム／パーカッション／ボーカル

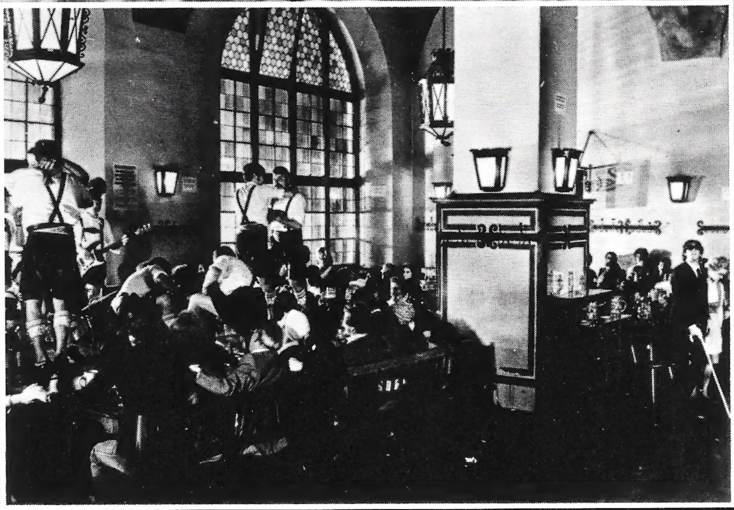
※作曲はすべて４人のコンビによる











Produced by ……………… CLAUDIO ARGENTO
Directed & Screenplay by …DARIO ARGENTO
Director of Photography ……LUCIANO TOVOLI
Music by ………………………GOBLIN

製　　作……………クラウディオ・アルジェント
監督・脚本…………………ダリオ・アルジェント
撮　　影……………………ルチアーノ・トボリ
音　　楽……………………………ゴブリン
主題曲〈サントラ盤〉東芝ＥＭＩレコード

▶CAST◀

SUZY	JESSICA HARPER
SARA	STEFANIA CASINI
MISS TANNER	ALIDA VALLI
MADAME BLANK	JOAN BENNETT
PSYCHOGICAL ANALYST	UDO KIER
MIGUEL	MIGUEL BOSÉ
DANIEL	FLAVIO BUCCI

▶キャスト◀

スージー	ジェシカ・ハーパー
サ　ラ	ステファニア・カッシーニ
タナー女史	アリダ・バリ
ブランク夫人	ジョーン・ベネット
精神分析学者	ウド・キール
ミゲール	ミゲール・ボゼ
ダニエル	フラビオ・ブッチ

定価 200円

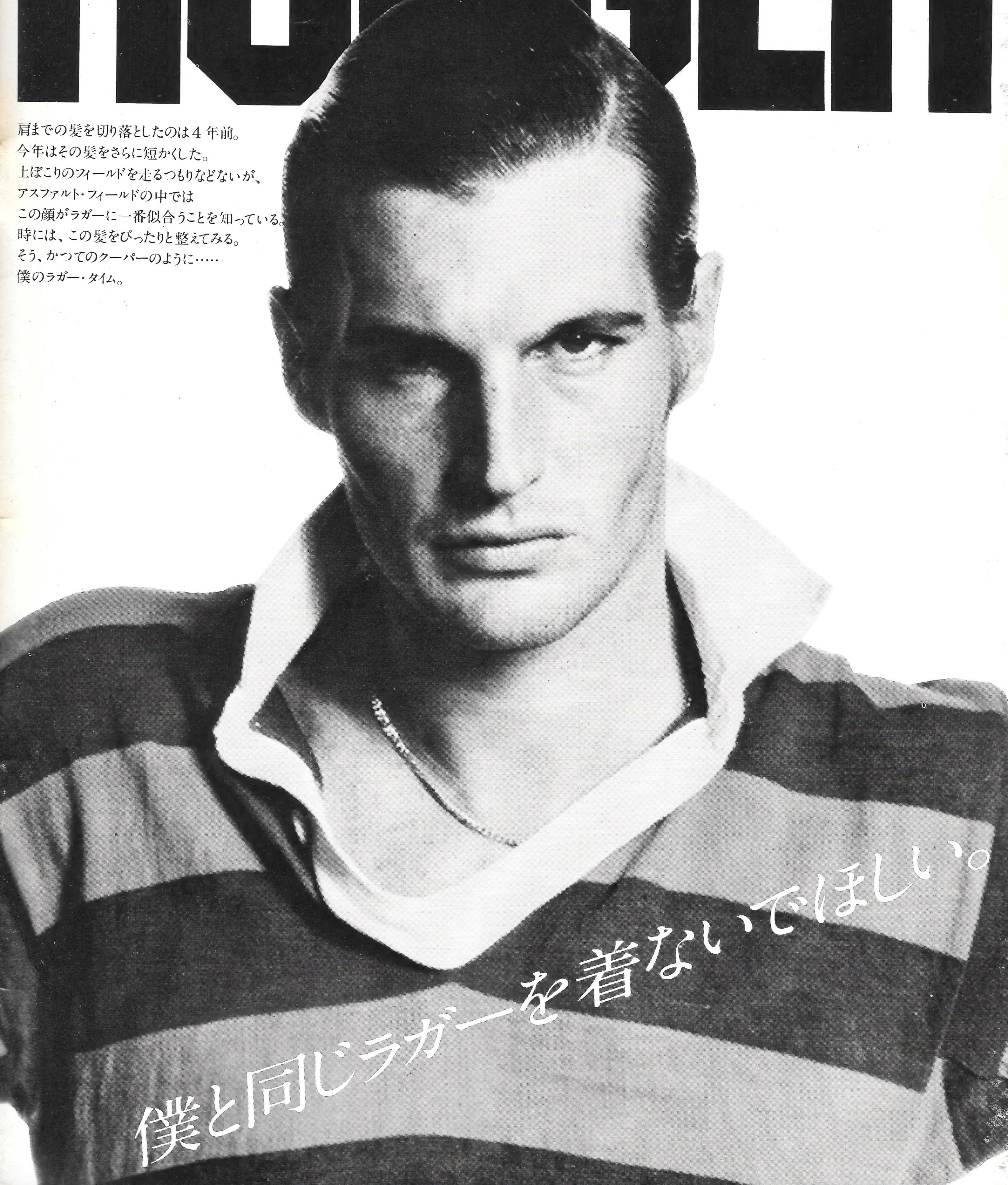
昭和52年6月10日印刷
昭和52年6月11日発行

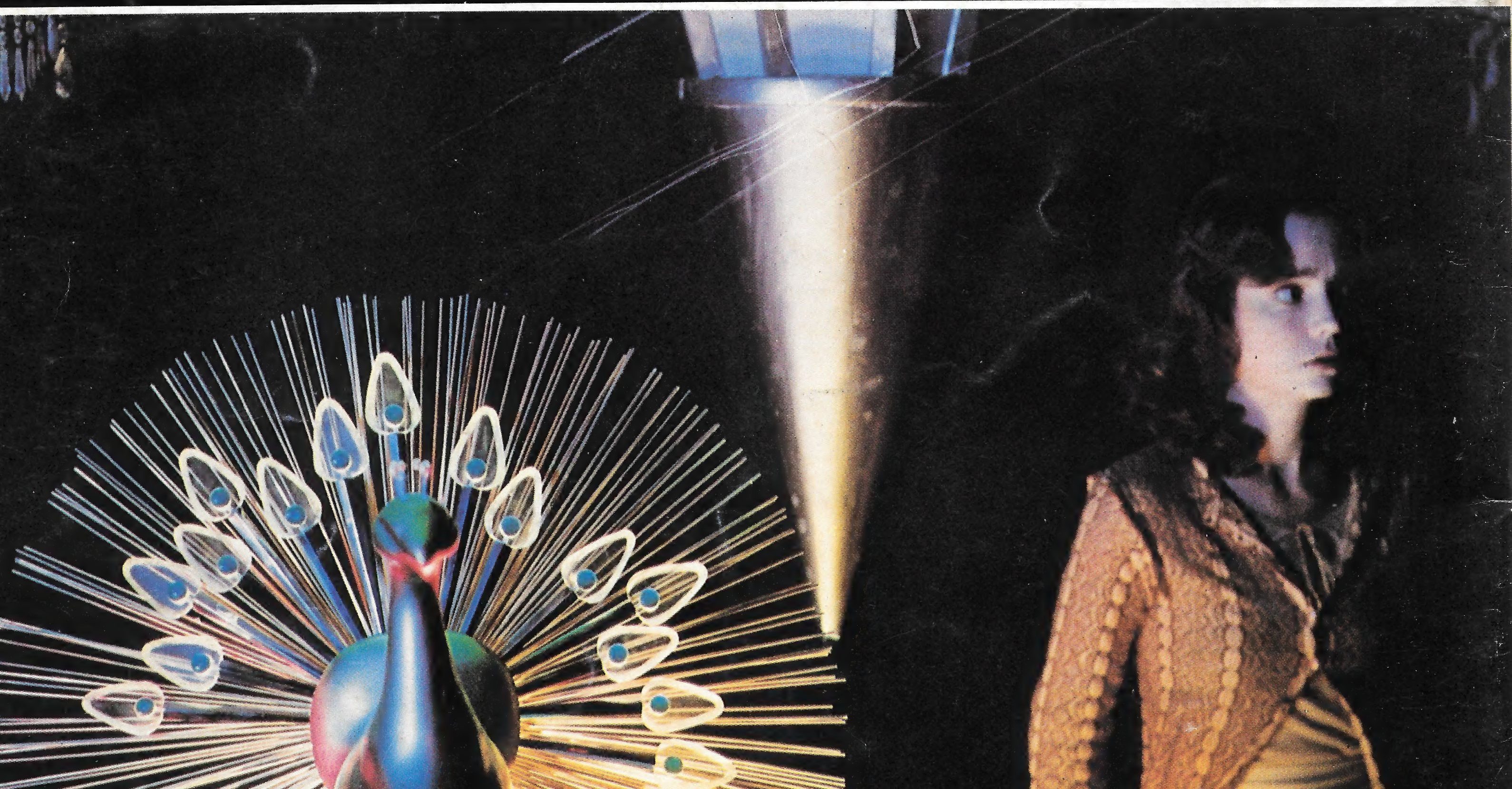
発行所　東京都千代田区有楽町1-2-1　東宝株式会社事業部
発行者　東京都千代田区有楽町1-2-1　大　橋　雄　吉
© 発行権者　東京都中央区銀座2-6-4プレイガイドビル内
東宝東和株式会社
印刷所　東京都港区芝2－1－28　成旺印刷株式会社

Not to join a team, even if wearing a Rugger. SCENE

RUGGER

肩までの髪を切り落としたのは４年前。
今年はその髪をさらに短かくした。
土ぼこりのフィールドを走るつもりなどないが、
アスファルト・フィールドの中では
この顔がラガーに一番似合うことを知っている。
時には、この髪をぴったりと整えてみる。
そう、かつてのクーパーのように……
僕のラガー・タイム。





Suspiria 東宝 TOWA